喜び、祈り、感謝する

テサロニケの信徒への手紙　一　五章一二節―二八節

二〇一〇年十二月十二日礼拝説教　秋吉隆雄　牧師

今日はアドベントの第三週です。来週、わたしたちは二〇一〇年のクリスマス礼拝を捧げます。その喜びのクリスマス礼拝の一週間前、与えられた御言葉は、テサロニケの信徒への手紙一の五章の最後、「結びの言葉」という小見出しがついている箇所であります。今日はこの箇所から御言葉に聞き入りたいと思います。

テサロニケ教会は、次のような状況で生まれてきました。パウロの伝道旅行は、いつもアンティオキア教会から送り出されています。第二伝道旅行に、パウロはシラスと共に教会員に祈られて出発します。現在のトルコを横断し、地中海に面した西のトロアスまで来ます。そこから船に乗ってギリシアに渡り、ヨーロッパ伝道を志します。最初は、フィリピの町で伝道し、紫布を商う婦人リディアの家族と、看守一家がクリスチャンになります。彼らがフィリピ教会の礎になっています。ところが、「このフィリピから出て行ってもらいたい」と言われて、次にテサロニケの町に来ます。

テサロニケは地中海に面した町です。わたしたちがトルコ・ギリシアのパウロの足跡をたどる旅行をした時に、テサロニケに行きました。小高い丘の上のホテルに泊まりました。輝く地中海が見える大変美しい町でした。

パウロは、この町で三回、ユダヤ教徒が集まる会堂でキリストの福音を語りました。すると、何人かの人が信じました。そしてユダヤ教に改宗していたギリシア人の婦人たちも信じました。少人数がパウロの福音を受け入れたわけであります。しかし、多くのユダヤ教徒は、パウロの福音に強力に抵抗、反対しました。彼らは、自分たちの力では不足と思ったのでしょう、ならず者を集めて町で暴動を起こし、「イエスという別の王がいると言っている。これはローマ皇帝への反逆である」とパウロの伝道を激しく妨害しました。あまりの混乱に、パウロとシラスは夜のうちに次の町ベレヤに逃れます。パウロは逃れてきたベレヤの町でも伝道していますと、テサロニケからパウロに反対するユダヤ教徒が押しかけてきました。そしてここでも群衆を扇動して伝道を妨害します。古代社会は宗教社会でありますから、信仰に命を懸けています。ユダヤ教徒のしつこい妨害のために、パウロはベレヤを去って、アテネ、そしてコリントへと移動しています。

テサロニケの町での伝道で、幾人かがクリスチャンになりました。そして、この少数の人々がテサロニケ教会を形成したのです。パウロの蒔いた小さな種が、そこで生き生きと育っていきました。けれどもパウロは、あのように激しい暴動が起こった町で信仰生活を守ることは大変困難が多いと心配して、弟子のテモテを遣わしてテサロニケ教会の状況を尋ねています。すると、多くの激しい、厳しい反対に遭いながらも、しっかりと信仰を保ち、教会形成をしていると、テモテから聞きました。そのうれしい報告を聞

いて、パウロはこのテサロニケの信徒への手紙を書いています。パウロがコリントの町にいたのは、おそらく紀元五〇年ごろでしょう。パウロの手紙の中では一番古い手紙です。パウロはこの手紙の中で、テサロニケ教会の人々に対して「わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています」と書き始めています。また、テモテのうれしい報告を聞いて「テモテがそちらからわたしたちのもとに今帰って来て、あなたがたの信仰と愛について、うれしい知らせを伝えてくれました」と書いています。身に危険が及びそうな暴動を受けた町で、このように信仰に生き、愛し合う関係が築かれていることは、パウロにとっては本当にうれしいことでした。「あなたがたが、キリストにならう者として、他のクリスチャンの模範となっていることが心からうれしい」とも書いています。

このテサロニケ教会から、テモテを通してパウロへの問いかけがありました。それは、「終末」に対する問いでありました。パウロはその問題に答えていますが、今日はその問題については多くを申し上げられません。パウロはテサロニケ教会に対する心配と不安から脱却することができ、うれしいと書いています。ですから、状況からして、内容は穏やかでやさしい手紙になっています。ご承知のように、パウロの手紙は大変激しいものがあります。喜び、怒り、悲しみ、そして信仰的な諭し。パウロは言葉を尽くして論じています。そのようなパウロの手紙の中では、このテサロニケの信徒への手紙は大変温和です。今日与えられました御言葉

の五章一二節から一五節までを、まずご覧いただきたいと思います。

「兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。互いに平和に過ごしなさい。兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい。すべての人に対して忍耐強く接しなさい。だれも、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい。」

お分かりのように、これらの言葉は大変穏やかです。パウロの他の手紙には大変激しいものがあります。例えば、コリントの信徒への手紙　一では「わたしがそちらに行くときには、そんな強硬な態度を取らずに済むようにと願っています」と怒っています。ガラテヤの信徒への手紙では、「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか」と大変叱責しています。また、フィリピの信徒への手紙では、「たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます」と殉教の決意をもって書いています。ところが、このテサロニケの信徒への手紙には、そのような厳しい言葉はありません。

ここで、まずパウロは「兄弟たち、あなたがたにお願いします」と言って最後の勧めを語ろうとしています。前半の最初に、「主に

結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。」それはそうでしょう。激しい反対者がいる中で教会を守り導く指導者たち、「彼らを敬いなさい」と勧めています。今の言葉で言うならば、「牧師に対して愛と尊敬を払いなさい」ということでありましょう。この問題に関しては、後で少しお話したいと思います。

次に「互いに平和に過ごしなさい」と勧めています。平和、共にあること。これがキリストにある者に最もふさわしいことだからです。

そして「怠けている者たちを戒めなさい」とあります。怠けずに働く。これは自分の生計を立てるだけではなくて、他の人のためにもなっていくわけです。私は、働くことは尊いことであって、怠ける人は自分自身を貧しくしていくと思っています。

そして、「気落ちしている者たちを励ましなさい。弱い者たちを助けなさい」と言っています。いつの世も、落胆させられ、弱い立場に追いやられている人々がいます。彼らを励まして助ける。これは、教会が生き生きとするために大切なことです。

また「すべての人に対して忍耐強く接しなさい」とあります。人は多種多様であります。その多様な人々と忍耐強く接して、「交わりをしっかりと持ち続けなさい。切り捨ててはいけない」と言っているわけです。

そして、「悪をもって悪に報いることなく、お互いの間でも、すべての人に対しても、いつも善を行うよう努めなさい」と言って

います。パウロは、彼の生涯において最後の手紙になったローマの信徒への手紙の中で「だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい」、「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」と書いています。イエス・キリストは、敵対する罪人のために十字架で死んでくださいました。イエス・キリストの十字架の愛を思う時に、悪に対しても善で応じて、その善で悪に打ち勝つ。これがパウロの深い信仰であります。

最初の勧め、「導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい」という御言葉ですが、これは平たく言うと「牧師たちを敬いなさい」という言葉です。私は、そうあってほしいと願っています。けれども、最近の教団の牧師たちを見ますと、もちろん全てではありませんけれども、牧師たちは大変不寛容になっているように思えます。「不寛容」というのは、自分の信仰、自分の思想が正しくて他を認めないということです。これは必ず権威主義になっていきます。そして、今一つは、主体的に問うことを止めて、上の人と思っている人に無批判に従う傾向が見られるように思います。そうなれば、切り捨て、排除が臆面もなく起こってきます。パウロはそのようには言っていません。「平和に過ごしなさい」、「すべての人に対して忍耐強く接しなさい」、「いつも善を行うよう努めなさい」と言っています。

パウロは、牧師を「主に結ばれた者として」と言っていますが、イエス・キリストに結びついている事実が、牧師には決定的なこ

とです。牧師もただの人間です。ですから、主に結びつくように教会によって育てられていく。私自身、教会によって育てられたと感謝しています。もうすぐ七十歳になりますけれども、まだまだ私は育つ余地が十分あると思っています。皆さんに、主に結ばれた牧師になるように私を育ててほしい、そう願っています。日本の教会全体がそのようになることを、今の教団の中で私は切に願っています。

後半、一六節からご覧いただきたいと思います。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです。『霊』の火を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。すべてを吟味して、良いものを大事にしなさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい。どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。また、あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り、わたしたちの主イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように。あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。兄弟たち、わたしたちのためにも祈ってください。すべての兄弟たちに、聖なる口づけによって挨拶をしなさい。この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように、わたしは主によって強く命じます。わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたと共にあるように。」

「いつも喜んでいなさい」と一六節にあります。イエス・キリストによって「良し」と是認されていますから、今の状況がどんなに破れていようとも、神はイエス・キリストにおいてわたしたちと共にいてくださる。だから「常に喜ぶ」と言っています。

次に「絶えず祈りなさい」とあります。祈りは、自分の目の前に神様がおられ、その神様に全身をもって委ねる。祈りは、神の前に身を投げ出して、神とわたしとの関係をきっちりと確認することです。そこで人間は人になる。これが信仰の基本です。

そして、「どんなことにも感謝しなさい」とあります。神様が与えてくださったこの時、この場を受け入れ、感謝する。感謝できないことがあまりにも多すぎます。それでも、神がイエス・キリストにおいて共にいてくださる。だからどんな時にも感謝すると言うのです。

このテサロニケの信徒への手紙は、喜び、祈り、感謝する、この三つの言葉で貫かれています。それがパウロの勧めです。この勧めは、「キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられること」であると言っています。そして、この信仰を維持するために、「霊」の火、聖霊のともし火を消してはいけません、と言っています。神様との交流は、ただひたすら聖霊によるものだからです。また「預言を軽んじてはいけません」とあります。この預言は、旧約聖書の預言者の預言ではなくて、イエス・キリストの福音を言葉で表すことです。ですから、福音の言葉をしっかりと受け止めるように、ということです。その受け止め方は、「す

べてを吟味して、良いものを大事にしなさい。あらゆる悪いものから遠ざかりなさい」です。「吟味する」とは一人ひとりが主体的に福音を判別するということです。他人から教えられることも、もちろん大切です。けれども、それだけではロボットになってしまいます。わたしたちはロボットではない。一人ひとりが苦しみながら、問い、考え、信仰を自分のものにしていく。そのように吟味して、自分自身で福音的なものとそうでないものとを見分ける。ここでは、「人」は皆、主体的な「わたし」になります。このことが大切だと言っています。

二三節からパウロの祈りが始まります。「どうか、平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように。」「聖なる者」、これは区別された者という意味です。その区別というのは、この世の弱肉強食の論理ではなくて、福音の論理に従い、平和の神の御心に沿って生きるということでありましょう。そのような「聖なる者としてくださいますように」と祈っています。次に「あなたがたの霊も魂も体も何一つ欠けたところのないものとして守り」と言っています。「霊」は、神様と交流する力です。そして「魂」はギリシア語では「プシューケー」とありますから、「心」とも訳せます。「体」は肉体です。ですから、心と体が、いつも神様の導きの中にあるように、という祈りです。さらにパウロは、「イエス・キリストの来られるとき、非のうちどころのないものとしてくださいますように」と祈っています。キリストが再臨した時に、恐れなくしっかりと確信を持って神様の前に立つことができ

るように、というわけです。この終末の日について、パウロはテサロニケ教会から問われていました。その回答は四章一五節以下に記されています。終末の日、イエス・キリストが来られる時、「神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます」と言うのです。「すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。」これが終末の日に起こると書いています。パウロの記した主の来臨の姿、かたちをそのまま信じることはできないと思っています。これは、あくまで終末論的な比喩でしょう。

初めに、神様は天と地を創造され、その中にすべてのものを創造されました。初めに神様が創造されたわけですから、必ず神様は終わりを「全き救い」へと招いてくださる。私はその終末の日を信じています。パウロは、その時に、テサロニケ教会で信仰に励んでいる人々を「非のうちどころのない者としてくださるように」と祈っています。そしてその後、「あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます」と続けています。終末の日に与えられる全き救い、全き喜びを、神は真実であるがゆえに必ず与えてくださいます。これは本当に確信に満ちた、うれしい言葉です。これを目指し、これを望んで今を生きる。これがわたしたちの終末信仰です。

最後に、「兄弟たち、わたしたちのために祈ってください」と、あの壮絶な伝道を展開したパウロは、祈りに支えられることを願

っています。もう牧師も信徒もないわけで、「共に祈り合って伝道に励む。そのようにわたしたちは一つである」とパウロは砕かれた心でテサロニケ教会の人々にお願いしています。「聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい。」パウロはローマの信徒への手紙書の中で、「兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい」と言っています。兄弟愛をもってお互いに受け入れ合う。そして今、わたしが出会っている相手は、わたしよりも優れた立派な方であると思いなさい、と言っています。そう思う時に、その人とは聖なる口づけがあるのみでしょう。テサロニケ教会に宛てた手紙を兄弟たちに読んで聞かせるように、「主によって強く命じます。」「命じます」という強い言葉です。当時はもちろん印刷技術はないわけで、パウロの書いた手紙は一通だけです。ですから、回覧して読み聞かせる。それによって、当時の教会は信仰的に養われていったのです。回し読みを強く勧めています。

そして、最後の祝祷の言葉です。「私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたと共にあるように。」これが今日与えられたパウロの心を尽くしたテサロニケ教会に宛てた手紙の祝祷の祈りです。

クリスマス礼拝を次の週に迎える今日、与えられました御言葉は、このような、パウロが心を砕いて書いた諭しの手紙です。それは、忍耐と平和と愛に生きるようにという信仰の勧めです。忍耐と平和と愛をもってキリストのご降誕を待つようにと、今日、

この御言葉を読むように定められています。わたしたちは、忍耐しながら、平和と愛をくださったイエス・キリストをお迎えして、わたしたちの救いの事実を確認し、ご一緒に喜び、祈り、感謝したいと思います。そのような喜びのクリスマス礼拝を来週ご一緒に捧げて、神様を心から賛美したいと思います。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉、本当にうれしく思います。パウロが記した手紙を読む時に、イエス・キリストによって救われた喜びの大きさが、彼の言葉を通し、彼の生き方を通してわたしたちに伝わってきます。イエス・キリストから愛され、神様から受け入れられた喜びが、どんなに大きいものであるかを知らされます。このパウロの言葉に従う者とさせてくださいますようにお願いいたします。来週、わたしたちは待ち続けてきたイエス・キリストのご降誕を祝うクリスマス礼拝を捧げます。どうぞ、教会員全員が一緒になって御子イエス・キリストを受け入れ、新しく信仰に出発する時としてくださいますようにお願いいたします。時代は様々な問題がありますけれども、神様は、それらをすべて受け止めて、「良し」として祝福を必ず与えてくださっています。このことを信じて、勇気を持って前進する者とさせてくださいますように祈ります。苦しむ者、悲しむ者、嘆く者の導き手として、わたしたちの信仰生活を前に進めてくださいますようにお願いいたします。この教会に召されていることを、本当にうれしく、感謝いたします。お互いに支え合い、愛し合って、神の御国の姿を現すことが

できますようにしてください。群れの中には、心や体に大きな苦しみを負っておられる兄弟姉妹たちがおられます。一人ひとりの全てを神様が知っておられます。どうぞ良きように祝福し、導いてくださいますようお願いいたします。来週の主の日、クリスマス礼拝です。どうぞ、クリスマスの豊かな祝福に与ることができますように、わたしたちを顧みてください。心からなるお祈りをキリストの御名によって御前にお捧げ申し上げます。アーメン

引用文献

聖書　新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讃美歌２１、日本基督教団出版局、一九九七年四月